

特集2 在外研究レポート ベルリンで過ごした一年

原田 哲史 教授

私が16年4月から17年3月まで研究滞在したベルリン・フンボルト大学は1810年の創立で、ドイツの大学としては非常に古いというわけではないけれども（ちなみに私が20代後半を過ごしたフライブルク大学は1457年設立）、

当時群雄割拠していたドイツ語圏諸国のなかでオーストリアからプロイセンへと覇権が移っていく画期のひとつシユタイン＝ハルデンベルク改革のなかで、ベルリン大学として生み出されている。したがって、その後、ドイツ帝国からナチス帝国をも通じて首都の大学として学術的にも政治的にも決定的な役割を担ってきたのが、この大学である。第二次世界大戦後は、東西に分かれたベルリンのソ連占領地域つまり東ベルリンに位置し、フンボルト大学と改称して、

東ドイツのトップ大学となったが、西ベルリンで新たに設立されたベルリン自由大学が向こうを張ってくる、という憂き目にもあっている。1991年のドイツ再統一後も両大学の統合はならず、医学部を除いて併存のままである。

私はこの大学の客員教授・研究員の共同研究室と図書館に、また近くのベルリン国立図書館にも通い、研究を続けた。後者は、ドイツの図書館のなかでも抜きん出て古い文献・資料を多く所蔵しているので、ドイツ経済思想史を研究する私にとって役に立った。ちなみにベートーヴェン自筆の第九交響曲の原稿（ユネスコ世界遺産）もこの図書館に所蔵されている。

当地での私の研究は、第1に論文『Noboru Kobayashi's Research on Friedrich List: A



Contribution on List Reception and Interpretation in Japan、(小林昇によるフリードリヒ・リスト研究——日本におけるリストの受容と解釈)の作成(11月に脱稿)。第2に3回の講演、5月にフランクフルト大学で『Friedrich List's Economic Thought as an Embodiment of the Serious Destiny of German Capitalism』(ドイツ資本主義の深刻な宿命としてのフリードリヒ・リストの経済思想)について、10月にオスナブリュック大学で『Friedrich List und Justus Möser aus japanischer Perspektive』(日本の視点からのフリードリヒ・リストとユストゥス・メーザー)について、そして1月にまたフランクフルト大学で『Adam Millers Generationenethik』(アダム・ミューラーの世代間倫理)について、である。その他3月には、

宗教改革500周年の聖地ヴィッテンベルクに行つて、ルター「95か条」の場の質実剛健さを体感したことも有意義であつた。総じて、日本にいれば時間に追われて十分な研究・調査ができない状況に陥りやすいなか、留学という良い機会をいただけたことはとても有難かつた。

このベルリン留学には、妻と愛犬のトイプードル「モコ」も一緒であつた。当地ではバス・

地下鉄・電車のすべてで犬をケージなしで乗せることができるが、ほとんどが中型犬や大型犬であり、小型犬しかもトイプードルは珍しい。しかも日本式にぬいぐるみのようにカットしたのはまずない。とはいえ、ぬいぐるみ文化そのものはドイツにもあるので、町や公共交通機関でモコを連れていけると大人気で、見知らぬ人が突然ニコニコ顔になったり、「まあ、かわいい!」と言つてくれたりすることがよくあつた。日本人のおっさん(私)ひとりではそんなことはないので、生活が楽しいものになった。日本の「かわいい」文化はマンガやアニメを通じてドイツでも広く普及しているが、ぬいぐるみ的小さいトイプードルはそうではない。ドイツ人たちもいつかそれに目覚めて傾倒することになるのか?

いや、中型犬・大型犬を主流とする彼らの犬文化がそれを阻むか。これこそ「文化と社会の経済学」講義のテーマとなりうるのではないかと怪しくも考えた。

フンボルト大学のサイトの客員教授コーナーに載せるための写真をくださいと言われたとき、研究室で本棚を背にしたものと、ベルリン桜祭り(春の日本祭り)でモコと写ったのとのどちらかを自由に選んでください、と言つて2

枚提出したら、後者がアップされていた。アカデミックであつても堅苦しさを嫌い、ジョークと多様性を好む現在のフンボルト大学を象徴する出来事だと思う。大学正門の写真に加えて、その写真も、ここに示しておく。

